

## &lt; 懲りんズ &gt;

SP ナガオカ氏との最後のジャーニーランは、四国初上陸で始まった。妻に車で佐賀関港まで送ってもらう。坂ノ市経由で彼を拾った。

待合室に入るや否や、ビックラ仰天。トライアスリートの山田君が座っているではないか。我が佐伯市トライアスロン連合のホープである。佐伯の海運会社に勤務し、坂出に長期出張だそうだ。バンの荷台には、ちゃんとバイクを積んでいる。流石だ。ナガオカ氏とも、上浦トライアスロンで顔馴染みだ。

お互いに奇遇を喜び、前途の無事を祈りあった。「こいつは朝から縁起がいいわい」と、この時は思ったのだが…。

8:20 三崎スタートだ。1kmほど走った三崎高校の校門前、何かが50m前を横切った。おりよりよ! 猪やんけ。人氣が全く無く、車も滅多に通らない。獣たちは、我が物顔なんだろう。歩道は「バカ」が蔓延り、糞だらけだった。

5kmほどで、半島の尾根に上がる。ここで、得意の連れションだ。ナガオカ氏は宇和海、私は伊予灘に向かって、豪快に放水した。二人は、ジャーニー中は必ず連れションをする。単ションは、まずやらない。別に、粗・・・を見せ合う訳でもないんだがね。本当に、ションがねえ奴等だ。

佐田メロディーラインに差しかかった。車が通る度に、「みーかーんーの～はあ～なあ～があー!」の曲が流れる。ゼンマイが伸びきった様で、力が抜けてしまった。

川之浜第4トンネルに入ろうとすると、背後から車が近寄ってきた。「おっ! 初応援者や」とナガオカ氏。「お兄さん方、何か落してますよ!」との声がかかった。振り返ると、彼のバックパックのファスナーが開き、50mに渡ってソックスやら何やらを撒き散らしている。「なんじゃ、こげんことか」とガックリ。收拾がよだきかった。

車しか通らない尾根道を、ヘンテコな身なりの旅ガラス二人。声を掛ける人は、まずおるまいて。

伊方キララ館で用を足す。連れション3回目だ。トイレのある所では、ちゃんとトイレでやるのだ。真下に、伊方原発が見えた。いかにも、脆そうだった。中規模の津波でも、一発でやられるな。くわばらくわばらだ。これからも、こんな風景を何度も目にするだろう。その度に、人間の愚かさを思い知らされるのか。胸が痛む。

伊方峠を越えると、下りにかかる。道端のみかんは、鈴生りだった。ナガオカ氏が、「一つ食べてえな。どっか、無人販売所でもないんか?」と言った。手を伸ばせば簡単に届く距離。しかし、ジャーニーの心得の一つに、「生り物は、たとえ落ちていても手を出してはいけない。」という決めごとがある。店に出会うまで、我慢してもらおう。

長い大峠トンネルを抜けて、保内町に下りてきた。待望の果物屋があったが、ばら売りは

していない。カゴ売りだった。隣のスーパーでも同じだった。我々には、一個あればいいのだ。ナガオカ氏が交渉したが、ダメだった。タダでくれとは言っていないのに、特別にバラ売りしてくれてもいいじゃん。怒ったぞ!!(古)。二人を見れば、どれだけ「みかんを食いたい」という顔をしているか分かるはずだ。結局、自販機でツブツブみかんジュースを買い、荒れる気持を宥めた。まるでガキやね、歳は食っているけれども。

今回はうまくいかなかったが、私とのジャーニーの時、交渉役はいつもナガオカ氏だ。力関係ではない。年齢だ。年下の役目なのだ。我々の世代では、暗黙の了解となっている。文句は出ないし、言わない。

まあ、体よく言えば「ネゴシエイター」だが、フツーに言えば「パシリ」だ。もし、私が年上の人とジャーニーをやれば、私がパシリだ。合点承知でいける。

それにしても、彼は交渉がうまい。商売をしているからか、手慣れたものだ。私は、何もなくてよい。助かります。

二人でブツクサ言いながら、名坂峠を越え、愛宕トンネルをくぐる。交差点を左折し、大洲街道に入った。40kmの間にトンネルが21もあった。

道中では、猥談に終始した。男二人がつるめば、話す事はそれに尽きる。話すだけなら何の罪にもならないし、大声で話しても、誰にも聞こえない。単純なNMコンビの脳ミソは、ややこしい話は受け付けない。最もリラックスできるのだ。WE ARE BAWDIES!

八幡浜駅を過ぎ、間もない所にあるローソンで大休止とした。八幡浜では、ジャコ天屋を見つけて食べる予定だったが、見つからず、やむなくコンビニのジャコ天で間に合わせた。

千丈川沿いにあるお地蔵さんの縁石に腰を下ろし、500mビールを流し込む。不謹慎でも、旨いものはウマイ。下校中の5人の小学生、「おじさん達、何してんの?」と問うた。「ジャコ天食ってビール飲みよんのじゃ。うめえぞ! おまい達も飲むか?」とナガオカ氏。もう、このおっさん不良や。子供になんちゅうことを。片腹が痛くてたまらなかった。

「どこから来たん?」「大分からや。三崎からここまで走って来たんぞ。すげえやろ。」と彼。「何しよるん?」「ジャーニーランや。この人《私を指さして》なあ、走って日本一周しよるんや。」と言って、私のジャーニーたすきを見せた。すると、皆キョトン、異口同音「ワケ分からん」を発して走り去った。

子供には、あまりとり合わない方がいいと思うよ。俺たちや、不審者にしか見えない。

さあ、いよいよ本日の最難関、「昼夜トンネル」にやって来た。こいつを越えて下れば大洲の町だ。連れション一発、猥談連発させて上っていった。気力が奮い立つ。

昼夜トンネルは長さ2141m、天井の孤の部分に半還流換気装置を設置したため、長方形になっている。ずいぶん古く、証明が弱い。昼通っても夜の様に暗いから、この名前が付いたのだろうか。歩道はなく、排気ガスで胸が悪くなった。抜けるや否や、ボトルのお茶でうがいをした。

峠を下り、西回りで大洲城を目指す。ここで、私の怠慢さが出た。大洲市街を綿密に調べていなかったのである。城の位置を勘違いして、右往左往するハメになったのだ。

人に尋ね、ナガオカ氏の携帯航空写真を利用して、ホテルの位置が判明した。城の西側にあるものとばかり思っていたのだが、実際は、北東2kmにあったのだ。完全にナメていた。

ジャーニーランナーにあるまじき行為だ。人里離れた所だと、命取りになってしまう。彼に頼り過ぎる所以か。

17:00 到着予定が、18:00 を過ぎてしまった。風呂に入り、洗濯を終え、「さあ、街に出よう」とナガオカ氏の部屋を覗いたのは、20:00 前だった。彼は、ベッドの上で寛いでいる。ソックス、アンダーシャツ、ショーツだけを風呂で洗い、手で絞ってバスルームに干していた。「これで乾く」と涼しい顔。羨ましいわ、その加減さ。この時ほど、自分の性格を恨んだことはない。1時間は早く「飲み」に行ける。

フロントで居酒屋情報を仕入れた。大洲の街は健康的だ。たいがい、21:00 には閉まるという。なんとか、遅くまでやっている店を聞き出し、第一放浪をした。

10分ほどで、「やっちゃん」という屋台を見つけたが、人の気配がしない。21:00 営業開始になっていた。

後で覗くことにし、次の店に行ったが、「もうオシマイ」とやられた。あちこちで、燈が消され、暖簾が終われている。こら、あきまへんわ。喉がカラカラや。脱水ならぬ、脱ビー症状だ。「ビール! ビール!! ビール!!! ビール!!!! 」と二人で喚き出した。

夜の太田砂漠「死の彷徨」になるのか、と諦めかけたその時、50m 先に灯りが見えた。透かさず、ナガオカ氏を斥候に出す。速い。店から出てくると、頭の上で○のサインを作った。よくやったぜ、ベイビー。安堵の胸をなでおろす。

「味へい」というよくある名の店。L字型のカウンターと中程度の座敷に、常連客がいっぱいだ。カウンターの隅が2席空いているだけである。ラッキーだった。

生大で、旅の無事を祝う。「お疲れさん。カンパーイ!」は最高のセリフだ。旅で一番の神聖なる儀式だが、一人の時は、これができない。呟くだけである。気分が出ないのだ。

肴は、普通の居酒屋メニューだが、目にしたことがないものが二つあった。「ジャコかつ」と「とりのハラミ」。旅の原則、「珍しいモノは試せ」に則って、早速注文した。

ジャコ天ならいざ知らず、それをかつにするとは何事ぞ。「邪道じゃねえんかい」と、顔を見合わせて口に入れると、「なんじゃあ! こりゃあ!! 」だった。ゴメンネ、ゴメンネ。

シャキっとした歯応えと、濃厚な旨み。「うめえ、うめえ。すげえ、すげえ。」と大はしゃぎする。さっきまでバカにしていたのに、この変わり身は何さ。ポリシー無いわあ、この二人。

これだけで、「味へい」は大当たりである。「とりのハラミ」は、ここしか出さないものらしいが、ジャコかつの後では、印象が薄かった。

飲み物は、いつの間にか日本酒に換わった。太田後藤酒造「喜多美人」だ。辛口で爽やかな風味。いい地酒に当たると、その地に愛着が湧いてくる。何杯でも、飲めそうな気がした。

ご主人が、奥の方でゴソゴソしている。奇妙な一升瓶を、デンと目の前に置いた。新聞紙でボディを巻き、その上に黒いラベルを張っていた。「お客さん、辛口がお好きのですね。こいつを飲んでみませんか。《とっておき》の辛口ですよ。」と勧めてくれた。

「蔵元の隠し酒番外品」という変な名の酒だ。飛騨古川の渡辺酒造である。新聞紙を一枚巻き、光を遮断して出荷とのこと。予約だけで完売、という幻の酒らしい。

確かに極辛だったが、味は微妙か。私は、喜多美人の方が好きだな。いくら幻の酒でも、おいしい、ご当地の酒には敵わないとの証明だ。「地に肴ありて、地に酒あり」。ジャーニー

が伸びていくにつれ、この詞に重み加わる。大田での、「開春 Vs のどぐろ」がいい例であった。ヒャー！たまらん。そのうち、飛騨古川にも行くさ!!

場が和み、酒が進む。メに一品、「ショーガかつ」を頼むと、「その先にある《やっちゃん》という屋台の方が旨いですよ。」とアッサリ言われた。最初に覗いた店だ。そら行かな、と腰を上げ、味へいを出したのは 22:40 だった。

「やっちゃん」のマスターは、我が佐伯が誇るお笑いコンビ、「大の字」の大谷君そっくりの兄ちゃんだった。「ショーガかつ」は、紅ショーガのスライスに衣を付け、揚げたものだ。宇佐のスナック、「愛」のママさんに教えてもらったそうである。

その話で、屋台は一気に盛り上がった。ヤバイぞ、これは。この時点で、午前様を覚悟した。「どうせ、明日は 60km 足らずだ。二日酔いでも、何とかならあな。」と、いつものパターン。ナガオカ氏との連ジャーニーは、こうなる定めだ。ほれ！スイスイイダララッタあスラスラススイスイ〜♪…。もおう、知らんわ。

フラフラしながら屋台にオサラバし、コンビニ風の雑貨屋に入った。私は、朝用の豆乳とリンゴを買ったが、彼は、バナナとゼリーとミニカップ麺を買いよる。「カップラーメンなんかどうすんの?」「朝メシにする」だって。朝から、カップ麺を食べるのかね。

それから、千鳥足でホテルに向かうが、酔っ払いの道迷いで、深夜の彷徨をやった。結局、ホテルに戻ったのは 00:05 だった。ジャーニーラン中の午前様なんて前代未聞だ。翌日(今日)の出発予定は 6:00 なので、眠る時間は 5 時間もない。酔いが醒める訳がない。どれだけキツイことか、解っているはずなのに、何度やれば気が済むのだろうか。

「いい加減にせんか」という、天の声にも馬耳東風の二人。幼児にも劣る、性懲りのなさ。「懲りんズ」という名前を頂戴するしかないね。有難いことです、「NM コリンズ」。ええ名前が付いたじゃないか。ハハッ、喜んでいいものやら、悲しんでいいものやら…。

## 《大洲城》

